No. 19

タイ・マレイシア国日本語教師調査団

報　告　書

平成 7 年 4 月

JICA LIBRARY
J 1126781 [2]

国際協力事業団
青年海外協力隊事務局

JICA
122
16.5
JNO
BRARY

青派一
JR
95 — 06

1126781 [2]

タイ・マレイシア国日本語教師調査団

報　告　書

平成 7 年 4 月

国 際 協 力 事 業 団
青年海外協力隊事務局

序

青年海外協力隊事業は発足以来３０周年を迎え、隊員派遣数は平成７年４月現在で述べ１５，０００人を数えようとしていますが、その中でも特に日本語教師に対する近年の要請増加は目をみはるものがあります。

マレイシア国教育省レジデンシャル・スクール（以下ＲＳ）に対する日本語教師隊員派遣は、マハティール首相が強力に推進した東方政策の一環として１９８４年に開始され、現在に至るまで１１年間指導を続けてきました。東方政策は従来の欧米志向を離れ、日本、韓国から技術を習得し、国家発展に寄与しようとするものです。そのためには日本語の習得が重要な要素として認識されており、隊員をＲＳという中等教育レベルへ受け入れることにより、日本語のわかる人材を育成することを大きな目的としています。

これまでマレイシアにはマレイシア人の日本語教師が少なく、隊員にとってはカウンターパート（Ｃ／Ｐ）がいない状況での活動であり、このことは今後の同国の日本語教育を考える上で常に大きな問題として認識されてきました。しかしながら、１９９５年４月からは日本留学を終え帰国したマレイシア人数名が協力隊員のＣ／Ｐとして、ＲＳに配属されることになりました。

この報告書は、これまでの隊員活動を振り返るとともに、Ｃ／Ｐが配置され、新しいステージを迎えるマレイシアにおける日本語教師隊員活動の今後の在り方を伊勢田涼子東京水産大学教授、荒川宣子聖心インターナショナルスクール日本語専任教師のお二人に、隊員活動視察や関係者との協議を基にとりまとめていただきました。また、伊勢田教授には、マレイシア訪問に先立ち、タイにおいて教育養成大学を中心とした日本語教師隊員の要請背景他を調査していただき、その結果も併せてまとめていただきました。

本報告書がタイ、マレイシアにおける日本語教育の協力指針となり、広く関係者に活用されることを願ってやみません。

最後に、この報告書をまとめるにあたり、本分野で活躍した隊員各位の努力と成果を評価するとともに、今回の調査にご協力いただいたタイ、マレイシア両国関係者各位に対し深く感謝の意を表する次第です。

平成７年４月

国際協力事業団
青年海外協力隊事務局
事務局長　高橋　昭

目　次

序　文
1　タイ
1－1　調査の背景・目的 …… 1
1－2　調査団員構成 …… 1
1－3　調査日程及び主要面談者 …… 1
1－4　調査概要 …… 3
1－4－1　タイの日本語教育 …… 3
1－4－2　タイの国際交流基金活動概要 …… 3
1－4－3　日本語隊員の派遣先 …… 4
1－5　所感・提言 …… 6
1－5－1　隊員の派遣先と今後の派遣について …… 6
1－5－2　本調査団の派遣について …… 8

2　マレイシア
2－1　調査の背景・目的 …… 9
2－2　調査団員構成 …… 9
2－3　調査日程及び主要面談者 …… 9
2－4　調査概要 …… 11
2－4－1　マレイシアの日本語教育の現状－その特徴－ …… 11
2－4－2　レジデンシャルスクール …… 12
2－4－3　国際交流基金との関係 …… 13
2－4－4　教育省 …… 14
2－5　所感・提言 …… 14
2－5－1－a　レジデンシャルスクールについて（伊勢田　涼子） …… 14
2－5－1－b　レジデンシャルスクールについて（荒川　宣子） …… 15
2－5－2　国際交流基金との関係について …… 17
2－5－3　教育省に関して …… 17
2－5－4　今後の派遣及び日本語隊員について …… 17

資料
資料－1　タイ国における日本語教育
（国際交流基金バンコク日本語センターによる）
資料－2　国際交流基金バンコック日本語センター概要（同上）

資料－３　マレイシアの教育概要

資料－４　レジデンシャルスクールの概要（マレイシア国レジデンシャルスクール日本語教師隊員活動中間報告書から）

資料－５　協力隊派遣先レジデンシャルスクール概要

資料－６　レジデンシャルスクール日本語学習者数（池田冨美子シニア隊員）

資料－７　日本語教師隊員配置図

1　タイ

1－1　調査の背景・目的

タイの日本語教育に対する日本政府の協力はすでに３０年におよび、チュラロンコン大学やタマサート大学をはじめ、主要な六つの大学には日本語を主専攻とする学科があり、そこで教えるタイ人教師には博士号取得者もおり、日本の大学での修士（博士前期課程）号取得者はかなりの数にのぼる。

現在は国際交流基金がバンコクに日本文化センター及び日本語センターを置き、直接日本語教育に当たると同時に日本語教育機関やその教師に指導上並びに教材等の協力を行っている。また、教育省の要請の下に高校の日本語教師の短期養成も行っている。

国際交流基金は上記両センターの他にチュラロンコン大学、カセサート大学、タイ商工会議所大学、チェンマイ大学に各１名、計８名の日本語の専門家を派遣している。

タイにおける日本語の需要は非常に大きく、日本語を習いたい者や教えたい機関の数は膨大で、青年海外協力隊も地方の大学や教員養成大学そして高等学校に日本語教師を派遣し、現在１１名の隊員がその任に当たっている。

１９９４年にタイとインドネシアに国際交流基金が「日本語青年教師（ＴＡＰ）」を高等学校に派遣することを決定したことにより、これら両国には協力隊からは高校の日本語教師は派遣しないことになった。

これらのことを受けて教育養成大学を中心に隊員の要請背景を調査すると共に国際交流基金との協力関係がどのようにあるべきかを考察するのが今回の調査の目的であった。

1－2　調査団員構成

伊勢田　涼子（いせだ　りょうこ）　東京水産大学教授　協力隊日本語ＯＧ

1－3　調査日程及び主要面談者

２月１０日（金）　10:45　成田発（ＪＬ－７１７）
15:45　バンコク着
18:00　デルタ・グランド・パシッフィク・ホテル着
19:30　ＪＩＣＡ事務所・国際交流基金との打ち合わせ
表所長、芹沢調整員、基金日本語センター内田裕主幹、
同北村武士主任講師、同上洋子専任講師（日本語ＯＧ）

２月１１日（土）　10:00　日本語隊員セミナー（ＪＩＣＡ事務所）
午前中　伊勢田調査団員講義
午後　　分科会－配属別ディスカッションと問題提起

	17:30	日本語隊員全員（１１名）出席
２月１２日（日）	10:00	日本語隊員セミナー（ＪＩＣＡ事務所） 全体総括
	12:00	日本語隊員全員（１１名）出席
２月１３日（月）	11:00	国際交流基金訪問（一日芹沢調整員同行） 基金のタイにおける業務について（内田主幹）
	13:00	基金主催昼食会 坂元洋子日本文化センター所長、内田主幹、北村講師、上講師、芹沢調整員
	15:00	チャンドラカセーム教員養成大学訪問 （芹沢調整員の要請確認に同行） 副学長、語学教育主任、日本語教師２名に面会し、学内視察
２月１４日（火）		仏教の祭日で休日
２月１５日（水）	8:00	ホテル発（一日芹沢調整員同行）
	10:00	アユタヤ教員養成大学訪問 Withya学長、Wilai先生、村松千恵隊員、建内陽子先生に面談
	13:00	昼食（芹沢調整員、村松隊員、上間隊員と） Rajamangala Institure of Technology(上間正泰・養殖隊員配属先）訪問
	17:00	ＪＩＣＡ事務所訪問
２月１６日（木）	7:30	ホテル　チェックアウト（空港まで芹沢調整員同行）
	8:30	タウィタピセク中等学校訪問 山田葉子隊員、カウンターパート(日本語教師)２名と面談、もう１名のカウンターパートの授業見学
	12:30	セタブットバンペー中等学校訪問 大久保美子隊員、カウンターパート（日本語教師)２名と面談、大久保隊員の授業見学
	17:15	バンコク発（ＭＨ７８３）

１－４　調査概要

１－４－１　タイの日本語教育

タイは主要大学（チュラロンコン大、タマサート大、カセサート大等）を中心に日本語教育がかなり確立していて、そのあとに続く大学でも日本語を副専攻から主専攻に移行する大学が次々と出てきている（ナレスワーン大等）。また、副専攻であってもタイ人教師がしっかりしている大学（シィラパコーン大等）もあり、東南アジアでは日本語教育のしっかりした国と言えよう。これはインドネシアと共通していることだが、タイ側の需要も高く、タイ人教師の努力と共に日本政府の多大な援助にもよっている。インドネシアと同様にタイでは自国の大学で日本語教師を養成しているが、このことは現地教師の日本語能力に非常に大きな差があることを意味している。マレイシアと違って現地教師（多くがチュラロンコン大及びカセサート大で主専攻か副専攻で勉強した者である）が大勢いるので、協力隊員の派遣先にＣ／Ｐは配置されているが、その能力に大きなバラツキがあり、それが問題である。また、いい教師がＣ／Ｐとして居着かないという深刻な問題があるが、これは公務員の給料が民間の半分程度でしかないというこれもまたインドネシアと共通する問題である。（資料－１　参照）

１－４－２　タイの国際交流基金活動概要

国際交流基金は日本語専門家を派遣するだけでなく、バンコクに日本文化センター及び日本語センターを置き、様々な活動を行っているが、日本語関係で言えば、最も活発なセンターと言えよう。協力隊の日本語隊員もセミナーに参加させてもらったり、日本語教育上の相談にのってもらったり、教材の協力を得たり、図書館を使わせてもらったりセンターの事業対象として多大な恩恵を受けている。このように以前からバンコクの基金のセンターは協力隊に協力的であったが、本来なら基金が教師を派遣すべき大学や他の機関で協力隊が活躍し、またセンターの事業をも支えてくれているとセンター側も協力隊の日本語隊員の活動を認めている。さらにセンターの主任教育担当教師は隊員の日本語についての相談にのるばかりでなく、隊員が教えている現場も視察を行ったり、人柄も良く隊員に大変人気がある。このようにタイにおいては基金と協力隊の連携が非常にうまくいっている。

基金が「日本語青年教師」を中等教育機関に入れることになり、協力隊が中等教育から撤退した後の対策として、現在教育省と協力して高校の日本語教師養成のための集中日本語講座を開いており、年２０名、３年間で６０名の教師を養成する予定だそうだ。既存の教師４０名と合わせて１００名の現地教師が１００校で日本語を教えるというのが大まかな計画である。日本から派遣される青年教師は中心的役割を果たすいくつかの高校に派遣され、そこから周辺の高校に対して活動を行うということであった。基金派

遣の日本語専門家の中には協力隊のＯＢ／ＯＧがかなり含まれているが、今回初めてアジアに派遣されるこの青年教師にもＯＢ／ＯＧが含まれている。（資料－２　参照）

１－４－３　日本語隊員の派遣先

一般大学とラチャパット大学について

タイには２種類の大学がある。一つはチュラロンコン大学を筆頭にする大学庁所轄のものであり、もう一つは教員養成から始まった教育省所轄の教員養成大学と呼ばれていたもので、現在はラチャパット大学（Rajabhat Institute）という名称に変わっている。高等教育の大衆化により、大学庁所管の国立大学も増え、私立大学もできていく中で、教員養成大学が教師養成だけでなく社会のニーズにより複数学部（教育、人文、理学、農学、経営の内の３～４学部で構成される）を擁した総合大学に変質する過程にあるものと思われる。この所轄の異なる大学間のランク差は本来の成り立ちの違いを引きずっているからと思われるが、教師及び学生の質の違いにはっきり表れていると思われている。教育省所轄のこの大学は名称変更に伴い昇格したのであるが、今回の調査の折に分かっただけでも教員のポストや学長の任命などで独立した大学とは言えないような未整備な点がある。

２月１１日（土）と１２日（日）の１日半のわたって行なわれた隊員セミナーには日本語隊員全員が遠方からも参加してくれ、短い時間であったが、親しく話すことができたのは幸せであった。隊員の皆さんと全体の世話をしてくださった芹沢調整員に心から感謝している。以下はその時に隊員から聞いたり、話し合ったりしたことによる。

大学庁所轄の大学には３名の隊員が配属されていたが、ナレースワン大学人文社会学部（木村ゆかり隊員）では９５年度から日本語が主専攻となり、その協力には高い技術レベルが求められるため、協力隊からの派遣は見あわせ、大学は基金に専門家の派遣を要請し、バンコクの基金事務所からも基金東京本部にその要請をしたとのことであった。主専攻になるための条件（タイ人教師４名、日本人教師２名、修士号取得者が望ましい等）がいくつかあるが、優秀な教師の獲得は困難で、実力には問題がありそうである。シラパコン大学ナコンパトム校（石川由美隊員）では１９９１年に選択科目から副専攻に変わり、日本の大学で修士号を取得した優れたタイ人教師２名のほかに、かつて基金派遣の専門家であった日本人教師もいるので、隊員にも専門家と同じ仕事が要求される。その意味では出来上がったコースと言えよう。コンケン大学教育学部（白木愛隊員）にはＣ／Ｐの現地教師がいない。当初は付属高校で教えるために始まったものであったが、コンケンに日本語学校がないこともあって、現在は小学生から社会人まで、日本へ行くための生活会話から日本からの留学帰国者のための中上級までいろいろなコースを開いている。３０時間の短いコースのための適当な教科書がないというのが白木隊員の悩みであったが、９５年度に日本語は学部生の選択の第二外国語となる。このように大学庁

所轄の大学と言っても内容は全くばらばらであり、個々にしっかりと対応しなければならない。

ラチャパット大学ではチェチェンサオ（木本寿美恵隊員）、カンチャナブリ（奥野裕美子隊員）、ソンクラ（藤沢陽子隊員）、チェンマイ（内山千尋隊員）、アユタヤ（村松千恵隊員）、に計５人が配属されている。この中でアユタヤだけが副専攻で、あとは選択科目となっている。これらの隊員のほとんどは人文学部外国語学科に所属しているが、教えているのは経営学部観光学科の学生に対してであったりするし、Ｃ／Ｐの現地教師は週末に一般の市民のクラスで教えたりする。従って学習者の就職先も観光業のみならず、日系企業などいろいろだそうである。レベルは初級がほとんどで、１コースの時間は９６－２４０時間程度である。今回で派遣が打ち切りになるチェチェンサオだけが２４０時間の上に特別コース１２０時間をやって、合計３６０時間で最長であった。これでも初級がやっと終わるかという程度で日本語能力試験で言えば、３級レベルである。他のラチャパット大学では４級レベルとのことであった。この５人に共通の問題はタイ人の教師が足りないことである。給料が安いからである。アユタヤでは修士号が日本で取れなかったから専攻を変えてしまったり、現在修士課程で勉強中であったり、日本留学中であったり、別の大学に移ってしまったりしたＣ／Ｐがいて、その名前だけが登録されていても実際には教師がいないということがおこっている。このような教師不足を補うものとして国際交流基金がアユタヤで日本語を勉強している学生３８名に将来教師になることを前提として奨学金を出しているが、日本語主専攻でなければ日本語教師になれないはずなので、解決策になるのかどうか定かではない。

今回の調査ではアユタヤのラチャパット大学のほかに隊員の派遣先ではないが新規に要請が出ているチャンドラカセム・ラチャパット大学を訪問した。この大学はバンコクの空港に行く途中にある大学で昼間の学生５０００人、夜間の学生８０００人ということであった。ここでは５年間日本語を教えているが、学習希望者が増えているとのことであった（３５０人以上）。日本語の教授内容は日本語の基礎と会話である。第二外国語としては日本語のほかにフランス語と韓国語（韓国のボランティアが来ている。学習者１００人）がある。日本語の現地教師は２人いるが、一人は学生と一緒に習ったということで全くと言っていいほど話せなかった。もう一人は高校教師から最近移ってきた人で、１９９１年に国際交流基金の浦和にある国際日本語センターの長期研修に参加したとのことであったが、運用能力はかなり低かった。あまり広くないキャンパス内に観光教育用のホテルもある大学である。

中等教育機関はこれで派遣打ち切りになるが、ホアヒンのワンクライカンウイオン高校（岩崎全人隊員）、バンコクの中心地にあるタウイタピセク高校（山田葉子隊員）、バンコク空港の近くにあるセタブットバンペン高校（大久保美子隊員）の３校に３名が配属されている。日本語を設置した理由や生徒の授業に対する反応にバンコク（都市）とホアヒン（地方）の違いも見られるが、学校側には日本語を看板にしていると高校運営に必要な民間の寄付が集まるとか、将来日本人が来て観光地になるのではとかいう希望

があるようだ。生徒に対しては日本語を勉強する動機付けをさらに強めていくことが重要である。バンコクの中心にある高校には特別に日本語の部屋というのがあり、生徒がここに来て漫画や本やビデオや置物を見たりできるようになっている。その部屋に隊員とかなり日本語のできるＣ／Ｐ１名の席がある。高校の日本語教育の中心的役割や果たしている高校のようで、隊員にとっても環境に恵まれており、授業見学で見た限りだが優秀な生徒が集まっている高校のようであった。この高校ではＣ／Ｐの内１名が経験もあり、能力も高いが、それ以外の高校のＣ／Ｐは英語との兼任で、日本語の能力が低く、よくできる生徒の日本語の力が先生と同じ程度になってしまうことがあるそうである。例えばバンコクのもう一つの高校のＣ／Ｐは日本語だけでの意思の疎通は困難であった。日本語の教育内容も学校によって違うが、３年間で初級の中程までである。マレイシアの中等教育はレジデンシャルスクールというエリート学校であり、設備も優れ、隊員の受け入れもしっかりしている上に隊員受け入れの長い歴史があるので、隊員が学校の教師の中に溶け込んでいるように見られたが、訪問したバンコクの二つの高校ではまだそのレベルには及んでおらず、今後の方向性を見守る必要がある。

１－５　所感・提言

１－５－１　隊員の派遣先と今後の派遣について

日本語センターができたばかりのマレイシアと異なって、タイの場合は国際交流基金がタイ全土の日本語教育の中心の役割を果たしている。基金が教師を派遣できない所に協力隊が日本語隊員を派遣するという構図になっている。大学庁所轄大学では主専攻があるような主要大学には基金からの専門家が派遣され、それ以外の地方大学には基金が派遣できないから（基金が海外に派遣している日本語の専門家は１１０名に満たない）協力隊で補う。ラチャパット大学にも基金は派遣できないから協力隊に来てもらう。中等教育については基金に日本語青年教師の予算がついたから基金がやることとなった。協力隊と基金は海外に日本語教師を派遣する二大機関であるが、日本語教師派遣は一本化したほうがいいのかもしれないし、将来的にはそうなるかもしれないが、眼前の問題を真摯に考えるのなら今は両者に十分なそして現実的な相互協力が必要である。協力隊でも基金でもない「日本語教師」という立場から言わせてもらえば、どちらからでも、そして両方から教師は派遣されうるのであり、協力隊と基金は今後さらに努力をして協力していくべきである。協力隊で海外に教えに行き、その後基金の派遣専門家として日本語を教えに行った者は何人もいるし、これからも増えるであろう。基金の派遣専門家が１００数名で協力隊派遣の日本語教師が１３０名から１４０名になり、次回は１５０名にもならんとするということをよく考えてみると、需要は増大しているのに基金の専門家がその分増えないから、協力隊が急増しているとも言えるであろうし、中進国が増え、中級技術者の需要が少なくなったから日本にしか要請できない日本語が協力隊で増えたとも言えるかもしれない。協力隊には専門家とは違う、専門家にはできない日本語

教育があるという意見もあるであろう。それは全く否定はしないし、そういう日本語教育を育ててほしいと願っている。

他の業種でもそうであろうが、協力隊員の日本語教師は協力隊員の面と日本語教師としての面を持っている。協力隊員としての面でいうと「後進国にかわいそうな人達を助けに行ってあげる」のだと無意識に思っているのではないだろうか。３０年前と違って、現在は特にアジアでは中進国が多く、それも日本語教師が派遣されるような所は中進国の中の後進地域であるはずはなく、どちらかといえば、先進地域である。そういう所は経済レベルは日本より低くても実質的には日本より豊かさではまさってる場合もある。日本語隊員が派遣先国を協力隊が来るところではないと言っているというのを時々耳にするが、古い協力隊イメージを引きずっているからではないだろうか。現代は「やってあげる」時代ではなく、「やらせてもらう」もしくは「いさせてもらう」時代である。やってあげることがあれば、幸いである。日本が無意識のうちに相手は着々と実力をつけているのである。日本人はどこに言っても謙譲に目障りにならないように「やらせてもらい」、相手国に「いさせてもらう」のである。自然に伸び伸びと明るく真摯にやるべきことをやり、そういう日本人をタイ人に知ってもらうと同時にタイを知ることが隊員になった意味ではないだろうか。これが将来見えない形で大きな付加価値になるのである。隊員にはこういうことを十分に認識してほしい。日本語教師という面からは、知識も経験も不十分は隊員が周りにモデルになるような先輩もいない所で心細げに仕事をしているのを見ると、派遣前訓練をより充実したものにしていく必要があると思うし、やる気十分なのに配属先の問題により年間１００時間未満のコースしか教えるチャンスがなく、せっかく培ってきたものが生かされないことでフラストレーションがたまっている隊員を見ると、今後さらに派遣先の調査に注意を払うべきである。協力隊だから仕事ができなくてもいいということはない。と同時にきちんと仕事ができる者が半端な仕事しかやらされないというのもいいことではない。この隊員の面と日本語教師の面のバランスをどううまく保つかが問題ではないだろうか。両面からの支援が必要である。

上述のことを踏まえてタイの場合は大学庁の大学にも教育省の大学にも応じられるだけの隊員を派遣するのがいいと考える。ただし、数回派遣したらすぐ打ち切りにするのではなく、派遣先をじっくり見定めて、一度派遣を決めたら長期に送り続けるようにしてほしい。それぞれの機関が一つ一つ異なっているので、大学といっても同様でなく対応がそれぞれ全く違う。一つの機関の日本語教育全般を育てるのにも時間がかかるのである。

基金のセンターのおかげで日本語教師は自分のＣ／Ｐも含めてレベルを上げるチャンスに恵まれているが、一つの国に１０名以上の隊員がいるような場合には数年に一度の割でも、できれば同じ人が調査に行けるとその国での変化が見え、その後の見通しが立つのではと思う。日本語隊員派遣に関してはタイはマレイシアより複雑で難しいという印象を受けた。派遣前訓練中に日本語教育に関してもっと時間をさくように、今後検討していきたい。

1－5－2　本調査団派遣について

本調査団の派遣前の情報収集が不十分であり、不便を感じた。例えば協力隊の図書室の報告書のファイリングなど整備をして見やすく分かりやすいものにしてほしい。図書室全体の整備充実を計る時期ではないだろうか。そうすれば情報収集がもっとしやすくなるのではと思う。

2　マレイシア

2－1　調査の背景・目的

タイと異なってマレイシアにおける青年海外協力隊の日本語教師の歴史は長く、協力隊の前身ともいうべきジュニアエキスパートの時代からマラヤ大学に日本語教師が派遣され、それが協力隊に継続され、マレイシア科学大学やマレイシア農科大学などにも派遣が広がった。国際交流基金の設立以来徐々に大学は基金の派遣対象機関となり、協力隊員は１９８４年からはＲＳにのみ派遣されるようになった。現在は３３校あるＲＳの内８校で日本語が正規の科目として教えられ、各校２名ずつの隊員と全日本語隊員及びその業務を総括するシニア隊員１名が派遣されている。任期が重なる部分があるので、訪問当時１９名の隊員が任に当たっていた。

ＲＳでの隊員の日本語教育もすでに１１年になるが、Ｃ／Ｐのいない活動であった。１９９５年４月からはＣ／Ｐが入る予定であり、新しい段階に入る年である。日本語教育の中でもほかに例があまりない「中等教育の日本語教育」としての１１年間の見直しをすると同時に今後のあり方を考察するのが今回の調査の目的であった。

また、国際交流基金はすでに１９９２年にクアラルンプールに日本文化センターを開設しているが、９４年１２月に日本語センターが設置されたばかりであり、今後の協力関係についていろいろと検討した結果、調査団にとって有意義な調査となった。

2－2　調査団員構成

(1) 伊勢田　涼子（いせだ　りょうこ）
　　東京水産大学教授　協力隊日本語ＯＧ
(2) 荒川　宣子（あらかわ　のぶこ）
　　聖心インターナショナル・スクール日本語専任教師
　　日本語技術補完研修（中等教育分科会）講師

2－3　調査日程及び主要面談者

２月１６日（木）　20:15　荒川　ＫＬ着（ＪＬ７２３）
　　20:20　伊勢田　ＫＬ着（ＪＭＨ７８３）
　　21:30　荒川　ホテル・グランド・コンティネンタル着
　　22:00　伊勢田　ホテル・グランド・コンティネンタル着

２月１７日（金）　9:00　ホテル発（一日草野忠征次長同行）
　　10:00　ＳＡＳ校訪問
　　校長に表敬訪問、授業見学（久保広高隊員）、

打ち合わせ（草野次長、池田富見子シニア隊員と）、
懇談（草野次長、池田シニア、久保隊員、上飯坂朗子隊員）
14:10　国際交流基金訪問
伴美喜子次長、エドワード・リー職員
17:30　所長主催夕食会
水田加代子所長、草野次長、池田シニア

2月18日（土）　一泊二日でコタバルのＳＴＭＦＰ校視察（池田シニア同行）
10:00　池田シニアとの打ち合わせ（コタバルへ出発まで）
13:40　ホテル発
15:25　クアラルンプール発（ＭＨ１３９６）
16:15　コタバル着
18:00　プルダナ・ホテル着

2月19日（日）　9:00　ＳＴＭＦＰ校訪問　校長に表敬訪問、
授業見学（森永昭彦隊員、山上りえ隊員）、校内見学
14:00　昼食兼懇談（両隊員と）
19:45　コタバル発（ＭＨ１４０５）
20:35　クアラルンプール着

2月20日（月）　7:30　ホテル発スレンバンへ
9:00　ＫＴＫ校訪問　校長に表敬訪問、
授業見学（矢野智恵隊員、三宅直子隊員）、
校内見学
11:00　ＳＤＡＲ校訪問　校長に表敬訪問、
全校一斉テストのため授業なし、
伊藤愛子・三原輝子両隊員と懇談、校内見学
14:30　ＫＴＫ校再訪問　矢野・三宅両隊員とＣ／Ｐ導入について
懇談

2月21日（火）　8:00　ホテル発イポーへ
10:30　ＳＴＡＲ校訪問（池田シニアと合流）
校長に表敬訪問、授業見学（仲道代・松本純子両隊員）、両
隊員及び小栗潔隊員と懇談、校内見学
14:00　ホテル・スウエン着
池田シニアと打ち合わせ懇談
2月22日（水）　8:00　ホテル発クアラカンサーへ（池田シニア同行）

9:00　ＫＭＫＫ校訪問　校長に表敬訪問、
授業見学（小林香与・川上晃子両隊員）
校内見学
13:00　両隊員と昼食懇談
14:30　クアラカンサー発クアラルンプールへ
20:00　国際交流基金と話し合い（基金主催夕食会）
伴次長、平賀達哉日本語センター主任講師、
草野次長、池田シニア

２月２３日（木）　9:30　ホテル発
10:00　教育省訪問（草野次長、池田シニア同行）
カスムリ・ＲＳ課長、
シャザリ事務官
14:30　マラヤ大学予備教育（ＡＡＪ）訪問（池田シニア同行）
鍵谷信郎日本人教師団団長、渡辺日本語主任講師
日本語派遣専門家数名
16:15　ＪＩＣＡ事務所表敬訪問
19:30　夕食会　草野次長・池田シニアとの最終懇談会

２月２４日（金）　10:00　ホテル発空港へ
12:45　クアラルンプール発（ＭＨ０７０）
20:00　成田着

２－４　調査概要

２－４－１　マレイシアにおける日本語教育の現状－その特徴－

マレイシアにおける日本語教育が他の国と比べて際立って異なっている特徴は、自国内に日本語科も日本研究科も持つ大学がないということである。(９３年にマラヤ大学文学部－Faculty of Arts and Social Sciences－内に日本研究プラグラムができた。ここでは、日本研究に日本語は必要がないという考えだそうである。９５年に初年度の学生が３年次生になるが、その３年次生に初めて日本語教育を行う計画であるとのことである。)すなわち、自国で日本語教師を養成する機関がないのである。

１９６４年に日本政府が日本語教師（ジュニア・エキスパート）を派遣して３０年になるのに、マレイシア人で日本語を教えている人の数は極めて少ない。他方、多数の留学生がマレイシア政府の官費及びＯＥＣＦ等で日本へも派遣されており、その予備教育に携わっている日本語教師のほとんどが日本から派遣された者である。マラヤ大学（１

２名)、マレイシア工科大学（８名)、などに国際交流基金が日本語の専門家を２５名、マラ財団（ＹＰＭ、ＯＥＣＦ奨学金）に拓殖大学から７名、マラ工科大学（ＩＴＭ）などに国際協力事業団からも派遣され、それに青年海外協力隊からレジデンシャルスクールに派遣されている２０名ほどを加えると、５０名以上の日本語教師が公的機関に派遣されていることになる。これは他の国には見られないことである。

現在中心的な役割を担っているマレイシア国籍の日本語教師は１０名にも満たないのではと思われるが、これは青年海外協力隊のみならず、他の機関の日本人教師にとっても、Ｃ／Ｐがほとんどいないということを示している。

マレイシア政府（教育省）がこれに対処するためにとっている方法は、マレイシアの大学に日本語科を作るのではなく、教師になる者を日本に学部留学させるというものである。この３月には最初の教師８－９名が卒業し、帰国することになっていた。しかし、２月末になってもその内の何人がどこに配属されるのか教育省のＲＳ課でさえも全く情報を持っていなかった。

２－４－２　レジデンシャル・スクール

①　ＲＳの概要に関しては、「マレイシア国レジデンシャル・スクール日本語教師隊員活動中間報告書」（ＪＩＣＡ，ＪＯＣＶ　平成４年１月）に詳しいので、ここにそのコピーを添付して説明に代えたい。（資料－４）

１９９５年４月現在、日本語教師隊員が派遣されているのは、３３あるＲＳの内８校であるが、今回訪問できたのは、以下の６校である。

※　Sekola Alam Shah (SAS)　男子校　Kuala Lumpur
※　Kolej Tunku Kurshiah (KTK)　女子校　Seremban
※　Sekolah Datuk Abdul Razak (SDAR)　男子校　Seremban
※　Sekolah Tuank Abdul Rahman (STAR)　男子校　Ipoh
※　Kolej Melayu Kuala Kangsar (KMKK)　男子校　Kuala Kangsar
※　Sekolah Tengku Mohammad Faris Petra (STMFP)　共学校　Kota Baru

各校とも、校長に表敬訪問をした後、隊員に校内（職員室を含む）を少し案内してもらった。緑のキャンパスの中に二階建ての校舎と寮、そして広いグランドがあり、恵まれた学習環境と言えよう。ＲＳにおける日本語学習者は、統計１３２０名（１９９５年２月現在）であり、どのＲＳも各学年を２つ～４つに分けて、１０～２５名前後のクラス編成にしている。

ＫＭＫＫを除き、どのＲＳも校舎と寮が同一敷地内にあり、あるＲＳでは、教室の窓からすぐ隣の寮に干してある洗濯物が見えたり、又、あるＲＳでは、学校も生活の生活の場の一部と化し、教室の机の周りが、家庭の自室の様を呈し雑然としていたりもした。しかし、殆どの日本語の授業は、静かな一般教室やラボでなされており、厚さ（天井取

り付けの扇風機あり）や虫（蚊）のために生徒の気が散ることもなかったように思う。

② １９９０年より始まった、マレイシア政府の派遣によるマレイシア人日本語教師養成プログラムで日本に留学中の学生数と配属校は、同プログラムで留学中のZubaidahさんの話によると次の通りである。

大学／年度	※90-95	91-96	92-97	93-98	94-99	95-2000
筑　波　大	1	1	1	1		
広　島　大	1	1	1	2		
杏　林　大	2	1	3	2	配属校	
明　海　大	4	2	0	1	未定	
文　京　大	2	2	3	1		
東　外　大	0	1	1	1		
麗　沢　大	0	2	3	3		
東　北　大	0	0	0	1		
姫路独協大	0	0	0	1		
大東文化大	0	0	0	2		
計	１０	１０	１２	１５	２０	１９

（１９９５年１月現在）

※　１年目は国際学友会日本語学校で、日本語集中学習（以下同）原則として、１、２期生は５年以上の教職経験者、帰国後７年の義務。３期生以降は、３年以上の経験、５年間の義務。

２－４－３　国際交流基金との関係

これまでのマレイシアにおける青年海外協力隊と国際交流基金との関係は教育省の試験として行われるＲＳの日本語の４年生の試験をマラヤ大学に基金から派遣された専門家が作成していたことにあった。

９４年１２月にクアラルンプール日本文化センターの一部門として国際交流基金クアラルンプール日本語センターが開設され、９５年４月から事業が開始されることとなった。それに伴い基金の伴次長がＳＡＳ校を初めて訪問する等基金側から協力隊の日本語教育に関心が示されるようになった。

本調査団はＲＳ６校を訪問した後、特にＣ／Ｐが入ってきてからのＲＳでの協力隊の日本語教育に対して教師養成やセミナー等を基金側に提案し、協力を要請した。と同時に、これまで基金派遣専門家が作成してきた上記の教育省の試験についても日本語センターとして配慮をお願いした。

具体的に言うと、マレイシアでは公平な評価をするために外部の権威ある所に試験の作成を依頼するというexternal examinerの制度を取っているので、ＲＳの日本語の試験を

マラヤ大学が作るということがおこるのであるが、教育省の試験となるこのような公的な試験の基準を作り、よりふさわしい試験が行われるようお願いした。

２－４－４　教育省に関して

初めは日本留学との関連で始まったＲＳの日本語教育であったが、日本語を学習した者で日本留学の道を選び者は４％未満であり、実際には外国語科目の一つになっている。この日本語教育の目的の変容については草野次長及び池田シニアのこれまでの努力のおかげで、シャリフ前担当官との間にはコンセンサスが形成されていた。シャリフ担当官が１月末に突然辞任し、その後任が当分決まりそうもないという時期に我々は教育省を表敬訪問し、シャリフ氏の上司であったカスムリ・ＲＳ課長及び同課のシャザリ事務官と面談した。話し合った内容は４月には日本から帰国し配属されるはずのＣ／Ｐの日本語教師とＲＳでの日本語教育の目的の２点であった。帰国するＣ／Ｐについては、教師経験者が教育省から日本に派遣されているのにその数も、今年帰国する者の数も、配属先についても、全く情報を持っていなかった。関心がないのかもしれない。日本語教育の目的についても「日本留学のため」であるということで、日本語等のＲＳでの外国語教育の現状もその教育的意味にも我々の理解との間に大きなギャップがある。シャリフ氏が辞任して、せっかく努力して築いたコンセンサスが崩れ、ゼロからのやり直しをしなければならなくなった。

２－５　所感・提言

２－５－１－Ａ　レジデンシャルスクールの日本語教育について－伊勢田　涼子

今回６校訪問したが、池田シニアが前もって授業見学等の計画をたて、また同行してくださったので、短時間であったがいい訪問ができた。彼女のコーディネーターとしての能力とリーダーショップに助けられた。また、各校で活躍している隊員の皆さんに啓発されると同時に、協力に深く感謝している。

協力隊員がよくやっていることは広く知られているところであるが、正規の科目を担当する教師という立場は非常に重いものであり、それも中等教育という学校教育の中で未成年者の教育に携わるのには優れた人格が備わっていることが必要である。その上に当然のこととして、日本語教育についての十分な知識といくばくかの経験も要求されるため実際的な訓練経験が重要な要素と思われる。海外での日本語教育のレベルも年々高くなってきているが、日本と緊密な関係にある東南アジアのエリート校であるから要求度も高い。４年生のいる６校の教育省の試験結果を見ると、上位校と下位校とにはっきりとした差があり、成績が上がらない原因を検討する必要があると思う。

日本語教育全体から見ると、中等教育は新しい分野であり、急激にその需要が伸びて

いる。しかし、日本国内では現場が少ない上に研究も進んでいない。その中で協力隊の１１年にわたるマレイシアのＲＳの中等教育での日本語教育は量においても、質（頻繁に合同会議を開き、教科書、練習問題帳、テストを作成するなど）においても非常に重要なものである。日本語教育の中では無視できない財産と言えよう。中等教育でこれほどの人数の日本人教師が携わったものはないであろう。その意味ではかれらはこれからの中等教育での人材である。この新しい分野を充実させるためにＲＳで教えたＯＢやＯＧの今後の活躍が大いに期待される。

ＲＳでの日本語教育は４年間で三百数十時間であり、初級レベルの中程までである。日本の大学に入るのに必要な予備教育を集中的に行っているマラヤ大学の２年課程の予備教育機関では２か月程で終了してしまう分である。もちろん中等教育機関と予備教育機関とでは根本的に目的が違うので、教え方も生徒の学習動機も違うために一概に学習時間だけでは比較できないが、ＲＳでの語学教育を留学目的に直結させるのには無理がある。また日本留学をしない９６％の生徒にとっての学習目的は何であるのか。フランス語やこれから教師を養成するドイツ語もそうであるが、直接的な留学目的から外して、中等教育期間の中で完結したものとしての教育的観点からの目的を定めるべきである。そして、学習者が予備教育機関に進んでも２か月程で消えてしまわないで残るものがなければならない。それが何であるかは具体的にここでは言えないが、それを探っていくのが「教育」ではないだろうか。

２－５－１－Ｂ　（荒川　宣子）

①　ＲＳでの日本語教育がスタートして早や１１年、その１１年間の蓄積は種々あろうが、今回の訪問で特に印象に残ったのは、次の点である。

ａ：ＲＳに日本人教師がいることが当たり前のこととして、生徒は勿論、教職員からも受け入れられている点。

ｂ：隊員によって作られ、マレイシアの教育省によって認可された教科書と問題集があり、８校が共通のシラバスに添って授業を進めている点。

ｃ：８校の隊員が話し合い、協力しあいながら、ＲＳの日本語教育を一つのプロジェクトとして進め、更さる発展のために努力している点。

ｄ：ＲＳ８校の日本語教育が日本人教師のみによって行なわれている、つまりＣ／Ｐが一人もいないと言うこと。

ｅ：校長の日本語教育への姿勢や理解の度合いが、隊員の活動にある影響を及ぼすということ。（例えば、時間割り編成上の優遇の有無や、共通テスト、日本文化祭への支援体制の相違、又、隊員と校長とのコミュニケーションの密度の違いから生じる相互理解の深浅等）

dのC／Pに関しては、2－4－2の②の表で分かるように、この4月には第一期生8～9名が卒業、帰国し、日本語予備教育機関やRSに配属される予定であるが、どこに何名配属されるかは2月現在未だ不明である。今後、毎年10名を超える教師が学位を取って戻っていくわけで、近い将来、RSにもかなりの数のC／Pが入ることが予測される。各校に、隊員一名とC／Pの協力体制が出来れば、現在の隊員数を増加することなく、マレイシアの要請通り派遣校数を増やすことは可能であろう。C／P配置後から、新たなかつ本来の日本語教育活動が始まると言う意識は隊員の中にあるが、では、具体的に何をどうすればいいのかという大きな戸惑いも、同時にある。C／Pの人数も、その日本語能力も来てないと分からないというのが現状なので、実際に入ってきてから時間をかけて、第二期RS日本語教育時代を作り上げていくことになるどろう。その際、現地JICAオフィス、マレイシア教育省、国際交流基金等の、隊員とC／Pに対するバックアップは勿論のことだが、シニア隊員のC／P配置についての判断や、隊員に対する具体的な手助けや指導が重要になってくると思われる。

② 全校試験中のSDARを除き、5校9隊員の授業を見学した。今回の調査団の主目的が、巡回指導ではなく要請背景調査ということで、授業前後に、各先生と授業に関する話し合いの時間が取れなかったため、個々のケースには触れず、全般的なことで意見を述べてみたい。

皆、試行錯誤を重ねつつ、一生懸命授業を行なっていたが、隊員の教授能力にはかなりの差が見られた。資質の問題もあろうが、知識はあっても経験の少ない隊員達のための勉強会や、現地研修（特に教授法に関する）の機会の必要性を感じた。さしあたっては、国際交流基金の日本語センターが中等教育の教師向けに何らかのコースを開設してくれることを期待したい。他の隊員（自校に限らず）の授業を観るのも勉強になるし、各人が1課ずつマニュアルを作って討議を重ねていくのも有益であると思う。言うまでもなく、教師用マニュアルは、近い将来増えるであろうローカル教師にとっても不可欠なものである。

中等教育の現場で教える教師にとって頭の痛いクラス・コントロールは、マレイシアの隊員にとっても大きな問題であり、複数校で、このままいけば完全に押さえが利かなくなる危惧を感じた。赴任初期の2、3カ月、適切な指導を受ければ習得できるコツも多々ある。現地で即、出来ることは、

① 引き継ぎの3カ月間をもっと有効に使う。先輩隊員は、2年間の経験を通してのノウハウをしっかり伝える。自分の授業を十分見てもらい、具体的にコツを示す。その後、引き継ぐ隊員の授業を何度か見学し、そのつど、各人の出来る範囲内で良いからアドバイスをする。後輩隊員も、この時期の重要性を十分認識し、謙虚かつ貪欲に先輩から学んでほしい。

② シニア隊員は、クラス・コントロールに問題がある、或いは、生じそうなRSの授業を、早い段階で少なくとも一週間ぐらい続けて見て、集中的な指導をするのが望ましい。

③　Ｃ／Ｐが入った学校は積極的にＣ／Ｐから学ぶ。

また、適任者捜しの難しさを承知の上であえて言えば、年に一、二度、ＪＩＣＡが中等教育の日本語専門家を派遣し、実践的な巡回指導が出来れば理想的であると思う。

２－５－２　国際交流基金との関係

日本語センターがこの４月に事業を開始するが、現状ではタイやインドネシアと異なって、マレイシア側に事業対象となるＣ／Ｐが十分にいるわけではない。ＲＳは格好の対象として協力を仰ぐことができると思われる。Ｃ／Ｐである現地教師を含むＲＳの日本語教師全体の日本語運用能力、日本語に関する知識、教授法、教材などについて、セミナー、ワークショップ、研修などバンコクの日本語センターがやっているような事をクアラルンプールの日本語センターが行うことは十分に可能であろう。また、将来的にはマレイシアの中等教育における日本語教育のありかたについて日本語センターの専門家と協議をし、より良いものを作っていくことも考えらる。協力隊の中だけの日本語教育の問題としてではなく、マレイシアの日本語教育という立場から国際交流基金とより緊密な協力関係を保つことが望まれる。

２－５－３　教育省に関して

今回の教育省の訪問は一回だけであり、それも今までの担当官が辞職した後であったこともあり、話し合いの内容は相互にかみ合うものではなかった。協力隊現地事務所の担当者の今後の苦労が思いやられるが、このように人が代わったことでゼロからのやり直しということは特に珍しいことではない。マレイシアはまだ若い国で、行政においても教育においても全体として経験も知識もまだ不十分であり、行政官も教師もまだ発展途上にあるように見受けられた。各人の仕事の内容についての取り組みが深まるにはまだ時間が必要であろう。経済的には豊かに見えるマレイシアではあるがこのような点ではまだ発展途上国である。協力隊側としてはこれを十分に踏まえて包み込む気持ちで絶え間ない努力をするしかないであろう。

２－５－４　今後の派遣について

日本がこれから国際社会でどのように生きていくか、どのように国際貢献をしていくかということを考える時に、日本語教育を通して日本を知ってもらい、同時に日本人が現地に赴いて日本語を教えることで異文化理解をすることは、日本にとっても、相手国にとっても有益なことであると思う。こういう意味での日本語教育の有用性は活用すべきであり、若いエネルギーがこの任に当たるのがこの変化の激しい時代には重要であると考える。その意味で適切な需要には応えうる限り応えるのがいいのではないか。

協力隊も設立３０年を迎え、内容的にも相当変化していると思われるが、当初の第一次産業が大きな部分を占めていた職種から適正技術が盛んに議論された第二次産業の職種を経て、近年は第三次産業が大幅に伸びているように見られる。これは必ずしも需要側の理由だけでなく、供給側の日本の事情によるのではと思われるが、それが現実ならば、その現実をはっきりと見据えて方針を立て、対処すべきである。

協力隊派遣の日本語教師の数が国際交流基金派遣専門家の日本語教師の数を大幅に越えてえることは需要と供給の両面から検討されなければならないが、多すぎるから減らすとか減らすとか少ないから増やすとかいう議論ではく、何のためにどのように派遣するのかが十分に検討されなければならない。

これだけ日本語教育が世界的に普及しレベルも上がっている現在、要求に見合う教師が派遣できるかという点では国際交流基金でも必ずしも十分とは言えないところがある。協力隊はボランティアであるから全くの素人でいいとも言えない状況になっている。プロであろうとボランティアであろうと仕事は仕事で、きちんとしなければならない。また、協力隊で日本語教師をした後、ＯＢやＯＧは何をするのかということも視野に入れて対処する必要がある。

協力隊として日本語教師を派遣する「視点」を議論、再検討してはっきりさせ、それに基づいて方針をたて、要請を掘り起こし、隊員を募集する。隊員に対しては自助努力が前提であるが、隊員として意識を持ち、物事に柔軟に対応し、隊員活動が充足したものになるよう、現在以上に抜本的対策が必要なのではと感じている。最近の候補生には日本語を専攻した者が多いようだが、実践経験は豊富ではない。また、派遣先の状況によって柔軟な対応が期待される。このためには非常に実際的な技術と知識を補充し、頭を柔軟にする訓練を派遣前の訓練期間中に行うことが望ましい。また協力隊の任期終了後も日本語教育の道に進みたいと思う者には情報収集ができるような方策を講じてあげることが望ましい。そうすれば自分の将来のヴィジョンを描くことができるであろうし、協力隊での経験が日本語教育に生かされ、成果があがることになるであろう。

池田シニアが非常に有能なので、今回の調査団の訪問がスムースに行なわれたが、マレイシア人Ｃ／Ｐ配属による今後の変化に対応するためシニア隊員の役割も今後検討する必要がある。

資　　料

資料－1

タイ国における日本語教育

1993年11月

1. 機関別日本語教育実施状況（1989年2月現在、大使館広報文化センター調査）

(1) 国立大学	17機関	4,589人
(2) 国立高専	20機関	4,677人
(3) 私立大学	3機関	228人
(4) 私立高専	10機関	5,908人
(5) 中等学校	8機関	539人
(6) 公益団体	5機関	7,968人
(7) 私立日本語学校	38機関	4,666人
(8) 会社等	36機関	905人
	137機関	29,480人

2. 日本語学習者数等の推移

調査年	調査者	学習者数	教師数	機関数
1979	大西　晴彦	10,651人	128人	29
1983	パカーディップ・サクンクルー	15,713人	144人	30
1985	中山　光男	16,591人	159人	31
1989	日本大使館広報文化センター	29,480人	441人	150

3. 日本語専攻講座を有す大学

(1) チュラロンコン大学〔国立〕
(2) タマサート大学　〔〃〕
(3) カセサート大学　〔〃〕
(4) タイ商工会議所大学〔私立〕
(5) チェンマイ大学　〔国立〕
(6) アサンプション大学〔私立〕

4. 日本語教育関係の概要（1993年度現在）

(1) 主要国立大学（日本語専攻課程は2年次より）

大学名	専任講師数 タイ人	専任講師数 日本人	日本語履修学生数	うち主専攻学生数
チュラロンコン大学	7名	2名	130名	90名
タマサート大学	9名	2名	375名	105名
カセサート大学	5名	2名	80名	32名

(2) 国際交流基金バンコック日本文化センター日本語学校

	中・上級講座	渡日前講座	合　計
講師数	※		
常勤講師	3名（3／0）	1名（1／0）	4名（4／0）
非常勤講師	4名（1／3）	1名（0／1）	5名（1／4）
登録学生数	277名	67名	344名
クラス数	14	2（～3）	16
開講時間	17:10－20:00	17:00－20:10	——
受講対象	学生・一般会社人	国費留学予定者等	——

（※印：カッコ内は、日本人講師／タイ人講師の内訳を示す。）

5. 日本語教育の歴史

年	日本語講座の開設、その他
1934頃	ボビットピムク商業学校〔一時中断、1968年再開〕
1964	日本留学生会日本語学校
1965	タマサート大学　〔82年に専攻科目となる〕
1966	チュラロンコン大学　〔71年に専攻科目となる〕
1969	日本大使館広報文化センター日本語学校
1972	ラームカムヘン大学
1973	泰日経済技術振興協会付属日本語学校
1976	カセサート大学　〔83年に専攻科目となる〕
1977	チェンマイ大学　〔87年に専攻科目となる〕
1978	プリンス・オブ・ソンクラ大学ハジャイ校
1979	コンケン大学
	キング・モンクット工科大学ラッカバン校
1980	タイ商工会議所大学　〔86年に専攻科目となる〕
1981	〔日本語、中等教育後期の正規選択科目となる〕
	カセサート大学付属学校
1982	シラパコン大学ナコンパトム校
1984	ナレースワン大学
1985	アユタヤ教育大学
1986	パヤップ大学
	タマサート大学日本研究センター設立
1988	アサンプション大学　〔88年に専攻科目となる〕
1989	ランシット大学
1991	国際交流基金バンコック日本語センター設立
	中等教育日本語センター設立

6. 一般公務員給与（初任給）1992年4月1日施行

普通高校修了	3,000バーツ
高等専門学校修了	4,260バーツ
大学（学士）修了	5,260バーツ
大学（修士）修了	6,460バーツ
大学（博士）修了	7,940バーツ

資料－2

国際交流基金バンコック日本語センター概要

１９９４年７月現在

(1) 開所：１９９１年6月２０日

(2) スタッフ

・日本語センター主幹　内田　裕

・運営専門員　渡辺　英晴

・事務職員　アリヤー・チャイディパアス（センター主幹補佐）
ガムチット・トリポップアーナン（司書／ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ・ｵﾌｨｻｰ）
ラッダワン・ウティオパート（ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ・ｵﾌｨｻｰ）
チャン・スエッペン（運転手）

・主任教育担当講師

北村　武士（日本語センター主任教育担当講師。基金派遣日本語教育専門家）

・教育担当講師

〔専任講師〕

大村　治　（日本語学校・中上級講座担当。基金派遣日本語教育専門家）
國府　卓二（日本語学校・中上級講座担当。基金派遣日本語教育専門家）
上　洋子（日本語学校・渡日前講座担当。基金派遣日本語教育専門家）
大竹　啓司（日本語学校・中上級講座担当）

ノッパワン・ブーンソム（日本語ｾﾝﾀｰ研修業務／日本語教師養成ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ担当）
プラパー・セーントーンスック（日本語センター研修業務／渡日前講座等担当）

深澤　仲子（日本語教師養成プロジェクト担当）
ウィパー・ガムチャンタコーン（日本語学校・中級講座担当）

〔非常勤講師〕

ワンチャイ・シーラパッタクン（シルパコン大学日本語講師）
河原　美奈子（シルパコン大学日本語講師）
丸山　秀夫（タイ商工会議所日本語講師）、他

(3) センター施設：

イ．借り上げスペース：８０８㎡（９３年８月にＢＢビルから移転）

ロ．施設：図書・視聴覚教材ライブラリー（ﾊﾞﾝｺｯｸ日本文化センター図書館に統合）、教室（７室）、講師室、会議室、事務室、倉庫（１室）、台所、ロビー他

～以下は１９９３年度に実施した主な事業～

(4) 研修会・セミナー等の実施および開催協力

イ．主催事業

(イ) 第５回日本語教育研修会

９３年４月１９日～４月２４日、５月３日～５月７日

於：日本語センター、カンチャナブリ・プンワーンリゾート

講師：５名、受講者：計４４名

(ロ) 第６回日本語教育研修会

９３年１０月４日～１０月９日、１０月１８日～１０月２３日

於：日本語センター、チュラディット・カオヤイリゾート

講師：５名、受講者：計３０名

(ハ) 第２回タイ人教師向け日本語基礎集中講座

９３年４月１９日～４月３０日

於：泰日経済技術振興協会

講師：４名、受講者：計３８名

(ニ) 第３回タイ人教師向け日本語基礎集中講座

９３年１０月４日～１０月１５日

於：泰日経済技術振興協会

講師：４名、受講者：計３９名

(ホ) 第５回タイ人日本語教師向け夜間日本語講座

９３年８月１７、２４、３１日、９月７、１４、２１日、計６回

於：日本語センター

講師：２名、受講者：計２４名

(ヘ) 第６回タイ人日本語教師向け夜間日本語講座

９４年２月４、１１、１８日、３月４、１１、１８日、計６回

於：日本語センター

講師：２名、受講者：計４４名

(ト) 日本人教師のための日本語教育研修講座

９３年１１月６、１３、２０、２７日（毎週土曜日）、計４回

於：日本語センター

講師：１名、受講者：計４０名

ロ．後援・協力事業（センター講師による講義等）

(イ) タイ南部中等教員向け日本語研修講座

（９３年１２月１６日～１８日。於：ソンクラ教育大学）

(ロ) 日本留学生会チェンマイ支部日本語研修講座

（９３年１１月２６日～２７日。）

(ハ) 中等学校日本語教師向けワープロ講習会

（９４年３月。２回）

ハ．開催経費助成事業

(イ) 中等教育日本語教育センター主催日本語教員研修会

９３年６月１１日～９月２４日、１１月１２日～９４年２月１８日

(毎週金曜日)、計２６回

於：日本語センター

(ロ) 教育大学日本語教育プログラム教員会主催日本語教育研修会

９３年５月２０日～５月２７日

於：日本語センター

(ハ) タマサート大学日本研究センター日本語教育プログラム主催セミナー「言語理論と教育現場の接点」

９４年３月２６日～３月２７日

於：タマサート大学ランシット校日本研究センター)

(5) コンサルティング事業

イ．日本語センター来訪の日本語教師に対する教材、教授法、カリキュラム等に関するコンサルティング。

ロ．日本語相談室（週２回）におけるコンサルティングの実施。手紙、電話によるコンサルティングも実施。

ハ．往訪コンサルティング（バンコックだけでなく、地方の機関に対しても実施。）

(6) 図書・教材ライブラリーの運営

イ．蔵書数：図書７，８４０冊、ビデオ７１１本、テープ９２２本、カード２８３冊、模型４７点

ロ．登録会員数：５２７名（日本語教師および日本語教育関係者）

ハ．開館時間：９：００－１８：００（月曜日から金曜日）

９：００－１７：００（第１、第３土曜日）

ニ．事業内容

(イ) 開架式による図書、視聴覚資料の閲覧

(ロ) 登録会員（日本語教育関係者に限定）来館者に対する図書・教材の館外貸出

(ハ) 登録会員（日本語教育関係者に限定）に対する郵送貸出。返送料は利用者負担

(ニ) 日本語教師に対するコピー無料サービス（但し、教材研究用に限定）

(ホ) 長期貸出（１カ月から１年間）

(7) ニューズレターの発行

イ．第６号（９３年　８月）　発行部数：６００部

ロ．第７号（９３年１１月）　発行部数：６００部

(8) 日本語教育補助教材の制作および制作助成

イ．「日本語初歩」フラッシュ・カード作成

ロ．「日本語初歩」教師用指導書タイ語版作成準備

(9) 日本語教育補助教材・教具の寄贈

イ．日本のカレンダーの寄贈：１００件

ロ．日本留学生会発行タイ人日本語学習者向け雑誌」「ANONE（あのね）」（第８号～第１０号。各５００部）を買い上げ、タイの日本語教育機関、図書館等へ送付。

ハ.「タイ日辞典」寄贈：１件（チェンマイ大学日本語科）

ニ. 教育機器特別寄贈：日本語教育機関９５校にワープロ・ビデオ機器を寄贈。

ホ.「新・日本語の基礎１」の寄贈：教育大学日本語教師３０名に寄贈。

ヘ.「日本語初歩」フラッシュ・カードを作成し、中等学校２０校に寄贈。

ト.「日本文学史」（チュラロンコン大学文学部出版）を１００部買い上げ、タイの日本語教育機関、図書館等へ送付。

(10) 日本語教育に関する会議等への協力

イ. 会議への参加等による協力

(イ) ランナー連合教育大学主催セミナー「外国語の教育と学習のための戦略」（９３年７月２７日～２９日。於：チェンマイ大学）

(ロ) モンクット王工科大学（ＫＭＩＴ）・兵庫県主催衛星通信テレビ会議「日本語教育分野における国際貢献の可能性」（９４年２月１６日。於：ＫＭＩＴ）

(11) 日本語センターの施設利用

イ. タイ国日本語教育研究会の打合せ及び月例会

ロ. 教育大学日本語教育プログラム委員会の打合せ

ハ. 文部省留学生試験

(12) バンコック日本文化センター日本語学校の運営

イ. 中・上級講座

平成５年度修了者数	中級コース１年	４２名	（８２名）
（カッコ内は登録者数）	〃　２年	４７名	（７９名）
	上級コース１年	２８名	（４５名）
	〃　２年	２５名	（３６名）
	研究コース	２６名	（４３名）
	合　計：	１６８名	（２８５名）

ロ. 日本語ワープロ講座

第１回　９３年１１月４日～１２月１６日　計７回

第２回　９４年　２月４日～　３月　４日　計５回

ハ. 渡日前講座

(イ) 前期コース：９３年５月２４日～９月１０日〔１６週間〕
２クラス、受講者数：２６名

(ロ) 後期コース：９３年１０月２５日～９４年３月１１日〔１９週間〕
２クラス、受講者数：４１名

(13) 国際交流基金本部事業（日本語課、日本語国際センター関係事業）の実施

イ. 日本語弁論大会（９３年８月２９日）の実施に関する協力

ロ. 東南アジア日本語教育短期巡回セミナー（９３年８月９、１０日）の受入れ実施（受講者数　１日目：５７名。２日目：８９名）

ハ. 日本語能力試験（９３年１２月５日）の実施に関する協力

ニ. その他各種主催・助成事業の実施

資料－3

マレイシアの教育概要

（１９９２年作成マレイシア国レジデンシャル・スクール日本語教師隊員活動中間報告書から抜粋）

１．教育制度

1）理念

発展を続けるマレイシアでは有能な人材の育成が急務となっており、第６次マレイシア計画・第二次２０００年への展望などにおいても、教育は重点的に扱われている項目のひとつである。

政策としては、１９５７年の教育令において「国民の必要を満たし、その文化的、社会的、政治的発展を促進する教育システムの確立」を掲げている。教育理念は学習指導要領において次のように規定されている。「マレイシアにおける教育とは、神への信仰と従順に基づいた、知性・精神・情緒・身体の面において調和と平衡の取れた人間を創るために、各種の教科・活動を幅広く学び、それを統合していくことにより、個人の潜在能力をより開花させていくための留まることのない努力である。この努力は、知識豊かで、高い人間性を持ち、個人のみならず、社会のために、責任を持って調和の取れた豊かな社会を創るために貢献する、マレイシアの市民を生み出すためである。」

具体的には、８３年に初等教育に、８９年に中等教育に導入された「新カリキュラム」において、「適切な知識・技術、及び強いモラル・道徳的価値のふたつのバランスがとれた人間を育成すること」を目標としている。

2）学制

マレイシアの学制は、初等教育、中等教育、高等教育の３段階に分かれる。

初等教育は日本と同じ６年制である。無償ではあるが、業務教育ではない。１９９０年現在の就学率は９８％である。小学校は、マレイシア語系のほかに中国語系やタミール語系などがあるが、後者で学んだものは、中学校に進学する前にマレイシア語の能力を高めるために準備講座（リムーブクラス）で１年間学ぶ。

中等教育は、日本の中学にあたる１年から３年、高校にあたる４年、５年、更に、６年や大学予備教育課程などの３段階に分かれる。

１年から３年までは自動的に進級できるが、３年時における全国統一試験（ＳＲＰ）に合格しないと４年に進級することはできない。４年、５年は、普通、工業、職業訓練とコースが分かれ、ＳＲＰの結果によってそれぞれの教育機関に進学する。

また、５年終了時にも全国統一試験（ＳＰＭ）があり、この結果によって６年、大学予備教育課程、高校専門学校、教員養成校などに進学する。

大学予備教育課程というのは、ＳＰＭの成績によってすでに大学への入学が決まった生徒が、大学に入る前に２年間の予備教育を受けるコースである。

６年は２年制であり、この期間に大学に入るための予備教育を受ける。ただし、６年に進んだ生徒は、６年時の全国統一試験（ＳＴＰＭ）を経て大学へ進学する。

3） 全国統一試験

マレイシアでは、以下に述べる４つの全国統一試験が行われている。

ＵＰＳＲ	:	Ujian Penilaian Sekolah Rendah	（小学校学力試験）
ＳＲＰ	:	Sijil Rendah Pelajalan	（中学修了資格試験）
ＳＰＭ	:	Sijil Pelajalan Malaysia	（高校修了資格試験）
ＳＴＰＭ	:	Sijil Tinggi Persekolahan Malaysia	（大学入学志願資格試験）

ＵＰＳＲは、小学６年時において行われ、この試験で優秀な成績を修めたものは全国に３４校あるＲＳ（５年制）などに進学する。

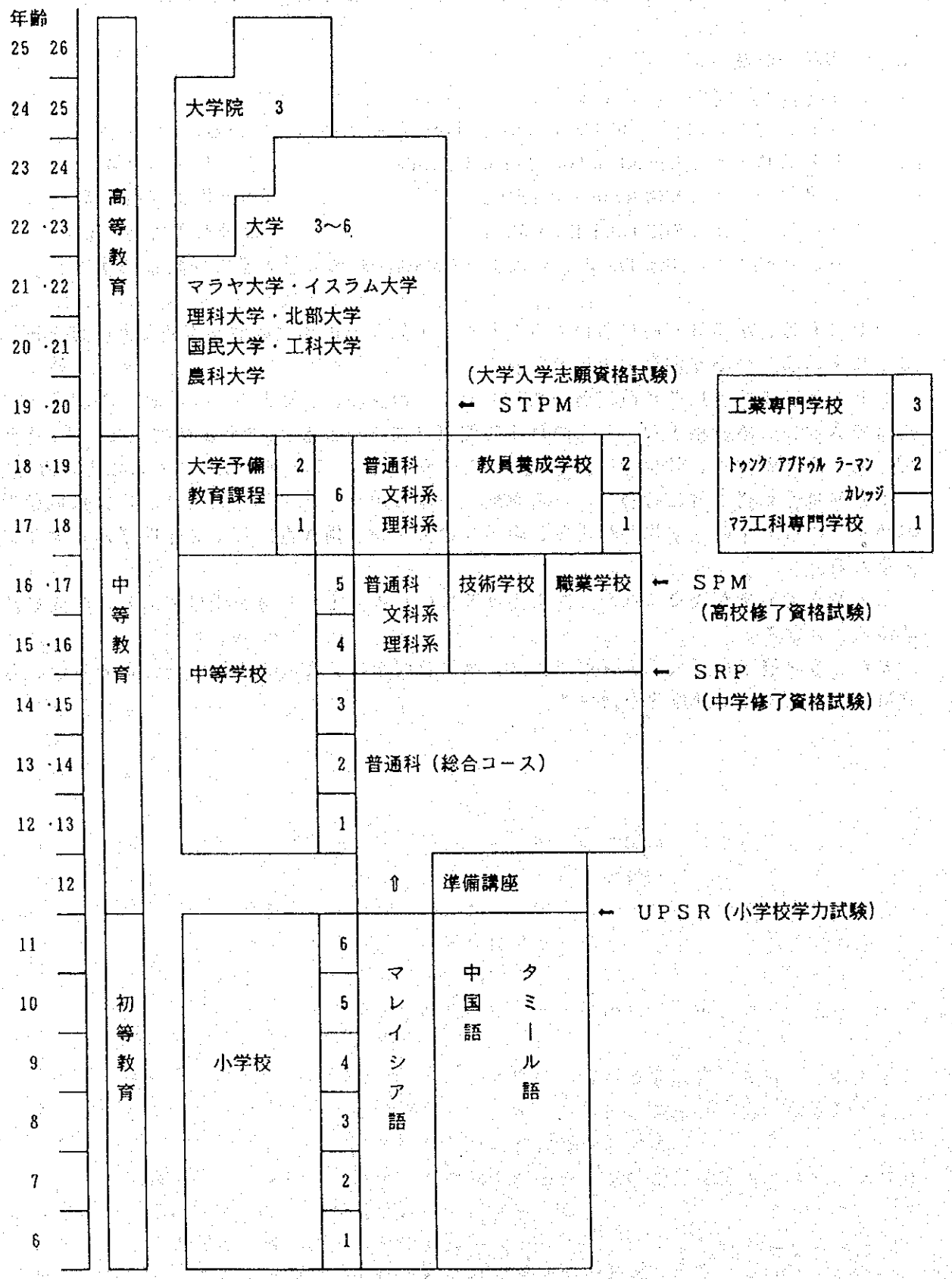
ＳＲＰは、中等学校３年時において行われ、この試験に合格しないと４年に進級することはできない。不合格となったものは１年間だけ在籍できる。（３年に留まって）が、次年度でも不合格となると学校で勉強を続けることができず、３年で学校を終わることになる。

ＳＰＭは５年終了時に行われ、この試験の成績によって進学先が決まる。優秀な成績を修めたものは大学の入学先が決まり、進学先の大学の予備教育課程で２年間学んだ大学に入学する。

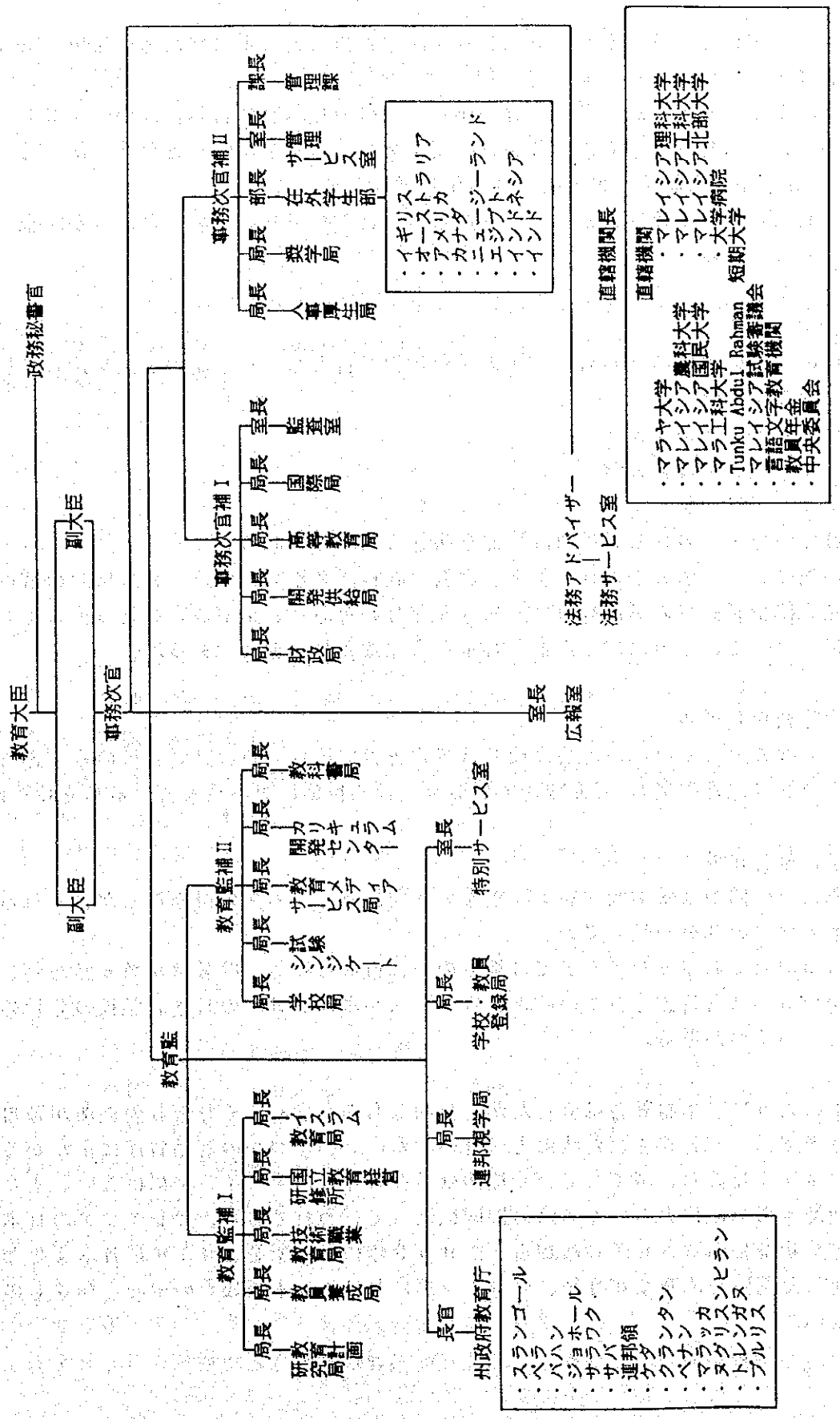
この時点で進学が決まらなかったものは６年に進み、ＳＴＰＭを受けて大学入学先を決めることになる。

また、５年終了後、大学進学のほかに、高等専門学校、教員養成校などに進めるが、ＳＰＭの成績によって進学先が決まる。

4） 教育システム


年齢
25 26
24 25
23 24
22 ·23
21 ·22
20 ·21
19 ·20
18 ·19
17 18
16 ·17
15 ·16
14 ·15
13 ·14
12 ·13
12
11
10
9
8
7
6
高等教育
中等教育
初等教育
大学院 3
大学 3～6
マラヤ大学・イスラム大学
理科大学・北部大学
国民大学・工科大学
農科大学
（大学入学志願資格試験）
← STPM
大学予備教育課程
2
1
6
普通科
文科系
理科系
教員養成学校
2
1
工業専門学校
3
トゥンク アブドゥル ラーマン カレッジ
2
マラ工科専門学校
1
中等学校
5
4
3
2
1
普通科
文科系
理科系
技術学校
職業学校
← SPM
（高校修了資格試験）
← SRP
（中学修了資格試験）
普通科（総合コース）
⇧
準備講座
← UPSR（小学校学力試験）
小学校
6
5
4
3
2
1
マレイシア語
中国語
タミール語

2.　マレイシア教育省組織図



3. マレイシアの日本語教育

マレイシアにおける日本語教育は日本企業の進出など日本の経済力の影響が強くなるに伴い、ますます盛んになってきている。

日本語ができると有利だという意識から、一般の日本語学習熱は高い。１９９１年より国家公務員でも日本語ができる者が日本語を要するポストにつくと手当てがつくようになった。「日本語能力試験」の受験者数も毎年増加している。

日本語教育には学校教育として行われるものとそれ以外のものとがあるが、以下に三つに大別して述べる。

(1) 大学レベル

全国の７つの大学のうち以下の４大学が選択科目として日本語の授業を持っている。

- マラヤ大学
- マレイシア国民大学
- マレイシア理科大学
- マエ工科大学

これらのコースの日本語教師は一部を除き現地教師である。

この他に、マラヤ大学の日本留学予備教育課程（２年）とマラ工科大学の東方政策担当部の産業技術研修生の予備教育コース（６か月）があり、集中教育を行っている。ここで教育に当たっているのはほとんどが日本から派遣された教師である。

(2) 中等教育レベル

授業に取り入れているのは公立校では当報告書で扱っているＲＳ８校のみであるが、その他クラブ（課外授業)として教えている公立校や授業に組み込んでいる私立校等がある。

(3) 学校教育以外

これには民間の語学学校・教室、企業の社内研修、公務員の研修などが含まれる。学習者の数ではこの部分が最も多い。

多言語国家であるマレイシアでは地方の小都市などにも語学教室が数多くあり、そこに日本語のコースも併設されているというケースが多い。日本の日本語学校の分校の形を取るものもいくつかある。

以上のように日本語教育は盛んだが、公的なものも含めてそれぞれの機関が独自に行っている形であり、整理された状態とは言いがたい。いくつかの管轄省庁にまたがる日本語教育の全体を見渡し、調整していく機関は現在のところマレイシアにはない。また、日本側の教師派遣等の協力もいくつかの機関によって行われており、マレイシアの日本語教育は複雑な状況にある。しかしながら、１９９０年に事務所を、９１年に日本文化センターを開設した国際交流基金が今後、マレイシアにおける日本語教育の中心となるものと期待されている。

レジデンシャル・スクールの概要

1.　レジデンシャル・スクールの教育

レジデンシャル・スクール（以下ＲＳ）は次のように規定されている。

1）　ＲＳの教育哲学

バランスがとれ、自分自身と社会とに対し責任ある人間、市民としての輝かしい到達点を目指して、潜在能力を持つ生徒の力を伸ばし発展させるためには、充分に計画、監督された完全な学校教育の環境が必要である。

2）　ＲＳの目的

(1) 潜在能力を持った生徒、特に整備された施設での教育を受けやすい都市部とは条件の異なる地域出身の生徒に機会を与える。
(2) 国家の必要に応じたさまざまな専門分野を受けるブミプトラ*の生徒の増加。
(3) リーダーシップ及び社会性の訓練を与える。
(4) 知識豊かで信仰心篤く、善行に励む人間、国民を生み出すためにマレイシア社会の願いにかなった人間性を育てる。
(5) 学校の全運営スタッフ、全教職員にＲＳの目標を具現化し、達成するための努力をなし得るよう、意識を持たせる。
(6) 輝かしい目標に到達するべく、教育設備を整え、良い学校教育の環境を創る。

＊ブミプトラ・・・「土着の民」の意で、先住民族とマレー系とを指す

3）　ＲＳの目標

(1) ＲＳの生徒は皆、次の学業成績を修める。
　①　ＳＲＰ　総点　１０以下
　②　ＳＰＭ　総点　１２以下

＊統計・・・ＳＲＰは５、ＳＰＭは６を最良とし、少ないほど良い。

(2) ＲＳの生徒は皆、次の義務を負う。
　① ひとつの制服団体に加入する。
　② 少なくともひとつのクラブに加入する。(学年度毎にクラブを変えることができる。)
　③ ＲＳ在学中は、少なくともひとつのスポーツをする。
　④ ＲＳはその参加するすべての競技会において、優勝または準優勝する。

(3) 一人一人のＲＳの生徒が、様々な係や活動のグループにおいて、リーダーとなるチャンスを持てるよう、できるかぎり多くの機会を作る。
(4) ＲＳの生徒は皆、在学中に一度は義務として「精神活動」の講習に出席する。
(5) 学校、生徒仲間、外部社会にとって有益なＲＳの全生徒に、社会に奉仕することを勧め、できるかぎり多くその機会を与える。
(6) ＲＳの全生徒のマレイシア語と英語の運用能力を高める。
(7) 誠実で適切な判断力、かつ責任感ある行動と態度を育てる。また、開放的、合理的、創造的な考え方、そして、相手に対する敬意を持つことのできる人間に育てる。

4) ＲＳの特徴

ＲＳは、日本語教育導入当時全国に２８校、１９９１年現在は３４校あり、小学６年時において行われるＵＰＳＲで優秀な成績を修めた者のみが、入学資格を得る。

教育費は食費と一部の教材費以外のほとんどが公費によって賄われ、これら一部自己負担分について奨学金制度もある。施設、設備、教師対生徒の人数比率、教師の有する資格・学歴、作業員数など、どれをとっても一般の公立中等学校とは比較にならないほど恵まれている。また、生徒の学習時間もはるかに多い。６）に見るように、一日に９時限プラスアルファの正規の授業時間以外に机に向うことを定められている「自習時間」が毎日３～４時間組まれている。

5） 教育課程

教育課程は学校長裁量で変わる部分が大きいので、次に掲げる表は参考として考えて頂きたい。ある年の、あるＲＳの時間割である。

学年	1	2	3	4理系	4文系	5理系	5文系
マレイシア語	6	6	6	5	5	5	5
英語	6	6	7	6	6	6	6
基礎理科	5	5	6	8	5	*	5
物理	*	*	*	5	*	5	*
化学	*	*	*	5	*	5	*
生物	*	*	*	5	*	5	*
数学	6	6	6	8	10	10	10
地理	3	3	3	3	3	3	4
歴史	3	3	3	*	3	*	5
公民	*	*	1	1	1	1	1
商業	*	*	*	*	3	*	4
簿記	*	*	*	*	4	*	5
イスラム教	4	4	3	3	3	3	3
家庭科	4	4	4	*	*	*	*
美術	2	2	2	*	*	*	*
体育	2	2	2	2	2	2	2
第二外国語	3	3	3	3	3	*	*
保健	*	*	1	*	*	*	*
朝礼	1	1	*	*	*	*	*
合　計	45	45	47	54	48	45	50

表内の数字は各科目の１週の授業時間数を示す

＊　１学年は２学期に分かれ、それぞれの学期は１週間程の中間休みにより二分される。
＊　週５日、４２週
＊　１週：９時限×５日＋午後の授業
＊　１時限：４０分

6） 生徒の授業日の日課

（例１：ＳＴＦ）

5:00～ 6:00	起床、礼拝
6:45～ 7:05	朝食
7:10～ 7:25	体操
7:35～ 1:55	授業
2:00～ 3:30	昼食、礼拝、休憩
3:30～ 4:30	自習時間
4:30～ 5:00	午後のお茶、礼拝
5:00～ 6:30	課外活動
6:30～ 7:30	シャワー、夕食、礼拝
7:30～ 9:00	自習時間
9:00～ 9:30	夜のお茶、礼拝
9:30～10:45	自習時間
11:00	就寝

（例２：ＳＴＡＲ）

6:00～	起床、礼拝
6:45～ 7:15	朝食
7:30～ 1:50	授業
1:50～ 3:30	昼食、礼拝、体操
3:30～ 4:30	自習時間
4:30～ 5:15	午後のお茶、礼拝
5:15～ 6:30	課外活動
6:45～ 7:15	夕食
7:45～	礼拝
8:00～10:30	自習時間
10:30～	夜のお茶
11:00	就寝

7)　ＲＳと日本語教育

マレイシアにおけるエリート校であるＲＳの、更にその「上位８校」といわれる現行の学校群が、日本語導入校に選ばれた理由として、

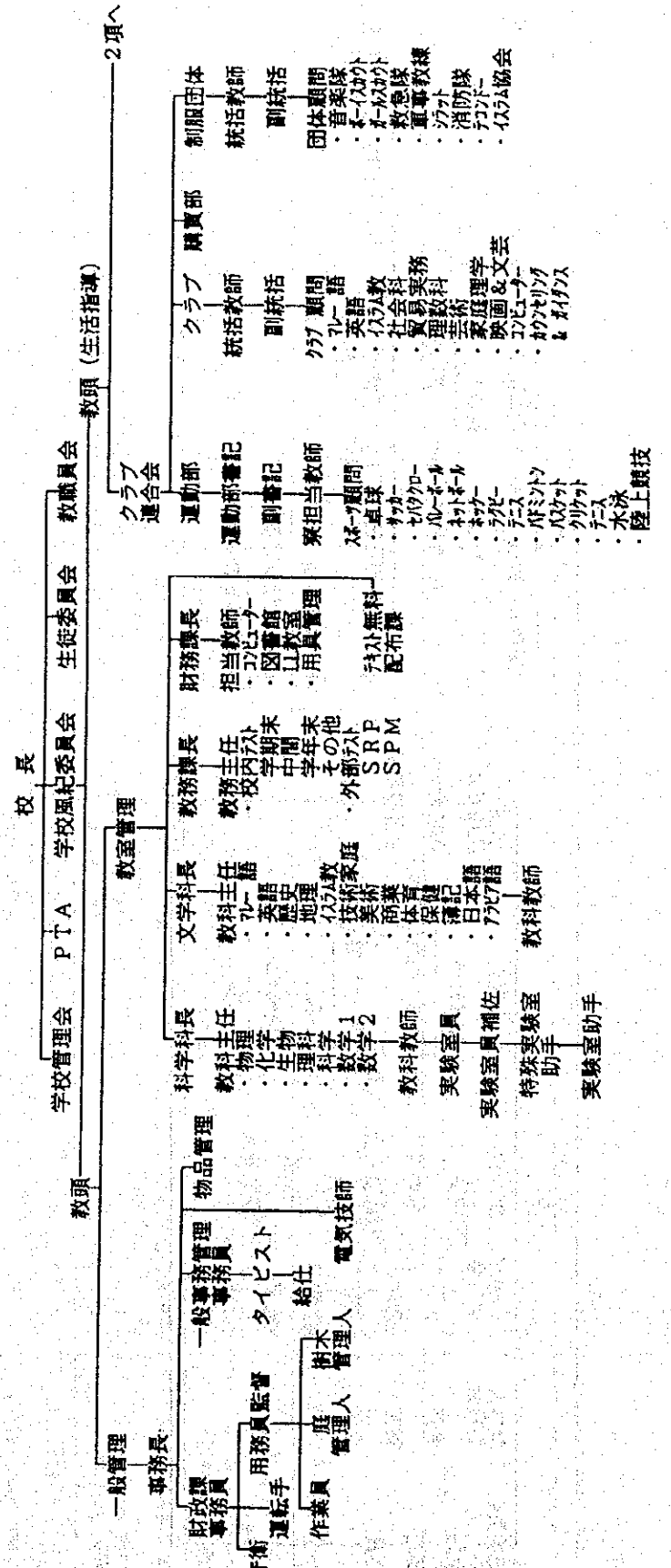
・東方政策はマハティール首相が強力に推進した計画であること。

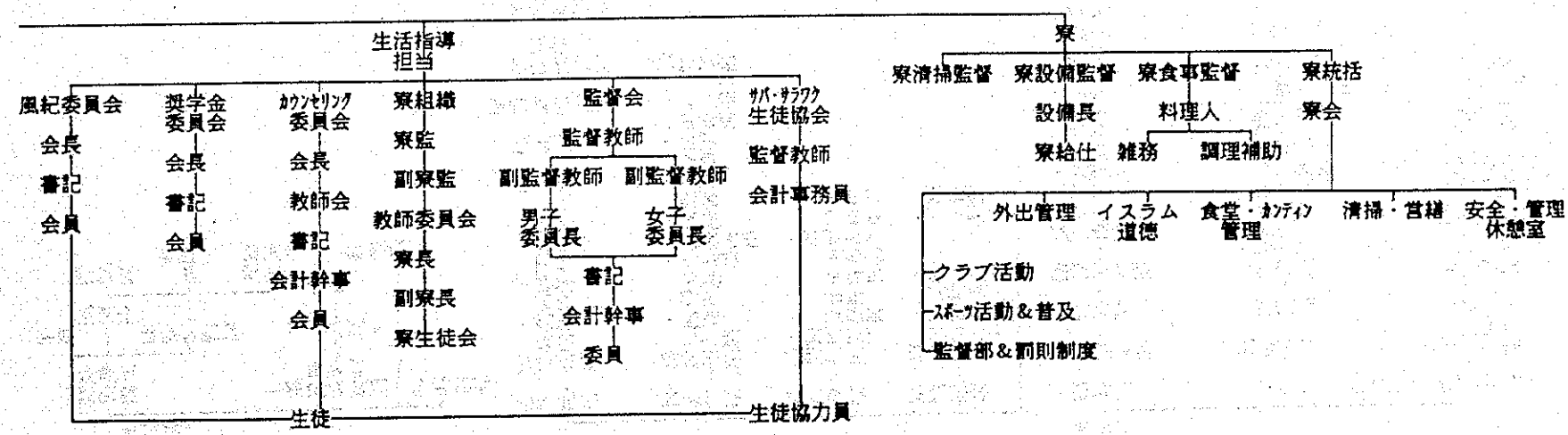
・将来の日本留学を容易にするためには、相当の優秀者を対象にすべきだと判断したこと。

・中等教育に新たに外国語を導入するに当たって、試行的意味もあったこと。

などが考えられる。

2. レジデンシャル・スクールの組織図




寮
寮清掃監督
寮設備監督
寮食事監督
寮統括
設備長
料理人
寮給仕
雑務
調理補助
寮会
外出管理
イスラム道徳
食堂・カンティン管理
清掃・営繕
安全・管理休憩室
クラブ活動
スポーツ活動＆普及
監督部＆罰則制度
生活指導担当
風紀委員会
会長
書記
会員
奨学金委員会
会長
書記
会員
カウンセリング委員会
会長
教師会
書記
会計幹事
会員
寮組織
寮監
副寮監
教師委員会
寮長
副寮長
寮生徒会
監督会
監督教師
副監督教師
副監督教師
男子委員長
女子委員長
書記
会計幹事
委員
サバ・サラワク生徒協会
監督教師
会計事務員
生徒
生徒協力員

資料－5

マレイシアＲＳ日本語教育詳細

1995年4月20日現在

学校名	住所	下段：校長名	第２外国語	JOCV	Malaysian
Sekolah Menengah Sultan Abdul Halim (ジトラ) C/P 有	06009 Jitra. Kedah Tel. 04-7143209 Fax. 04-7143215	共学校 1972年創立 1984年８月開始 Haji Mizuar bin Haji Nasarudin	アラビア語 日本語	桝井智英 (～95. 12. 05) 金子信子 (～96. 04. 03)	Ainun Maziah Abdul Rahman
Kolej Melayu Kuala Kangsar (クアラカンサー)	33000 Kuala Kansar Perak Tel. 05-7761400 Fax. 05-7764500	男子校 1905年創立 1984年１月開始 Haji Hassan bin Hashim	アラビア語 日本語 フランス語89 中国語95	小林香与 (～96. 04. 03) 川上晃子 (～96. 12. 04)	
Sekolah Tuanku Abdul Rahman (イポー) C/P 有	Jalan Sultan Azlan Shah 31400 Ipoh. Perak Tel. 05-557733 Fax. 15-567000	男子校 1955年創立 1984年８月開始 Dawa @ Dawa bin Abdullah	アラビア語 日本語 中国語92	松本純子 (～96. 12. 04) 仲 道代 (～96. 12. 04)	Lee Sau Lan
Sekolah Alam Shah (ＫＬ)	Jalan Tenteram Bandar Tun Razak 56000 Kuala Lumpur Tel. 03-9318393 Fax. 03-9318119	男子校 1963年創立 1984年８月開始 Haji Mohammed Zon bin Ramli	アラビア語 日本語 フランス語	上飯坂朗子 (～96. 12. 04) 久保広高 (～96. 12. 04)	
Kolej Tunku Koushiah (スレンバン)	Jalan Tunku Kurshiah 70400 Seremban Negeri Sembilan Tel. 06-725351 Fax. 06-719906	女子校 1947年創立 1984年１月開始 Hajah Yunidzar binti Mohd. Zain	アラビア語 日本語 中国語95 (仏語84)	矢野智恵 (～95. 12. 06) 三宅直子 (～96. 04. 03)	
Sekolah Tun Fatimah (ジョホールバル)	Jalan Tun Abdul Razak 80000 Johor Bahru Johor Tel. 07-2364706 Fax. 07-2376961	女子校 1957年創立 1984年８月開始 Morni Karto	アラビア語 日本語 フランス語87	品川直美 (～95. 12. 05) 永井雅子 (～96. 04. 03)	
Sekolah Tengku Mohammad Faris Petra (コタバル)	16100 Pengkalan Chepa Kelantan Tel. 09-7738277 Fax. 09-7739139	共学校 1973年創立 1992年12月開始 Isak bin Sin	アラビア語 日本語 中国語88	森永昭彦 (～96. 07. 10) 山上りえ (～96. 12. 04)	
Sekolah Datuk Abdul Razak (スレンバン)	Jalan Sikamat 70400 Seremban Negeri Sembilan Tel. 06-725681	男子校 1957年創立 1992年12月開始 Haji Jail bin Morah	アラビア語 日本語 フランス語	伊藤愛子 (～95. 12. 05) 三原輝子 (～96. 12. 04)	

20／05／95

BILANGAN PELAJAR BAHASA JEPUN BAGI SETIAP TAHUN

各校別日本語履修者総数

	84	85	86	87	88	89	89/90	90/91	91/92	92/93	93/94	94/95
SMSAH	51	176	199	226	302	245	237	230	212	223	219	224
KMKK	76	201	294	238	269	201	172	170	171	179	192	167
STAR	53	182	224	286	310	185	226	222	209	201	168	143
SAS	187	163	114	146	152	145	148	146	156	151	162	165
KTK	51	171	244	245	257	188	181	184	191	203	202	175
STF	56	190	235	285	271	227	224	208	219	213	216	207
STMFP	-	-	-	-	-	-	-	-	-	37	56	97
SDAR	-	-	-	-	-	-	-	-	-	49	92	149
jumlah	474	1083	1310	1426	1561	1191	1188	1160	1158	1256	1307	1327

資料－6

20/05/1995

BILANGAN PELAJAR TINGKATAN SATU BAGI SETIAP TAHUN

各校別日本語選択一年生の数

(1984～95)

学校名	1984	1985	1986	1987	1988	1989	89/90	90/91	91/92	92/93	93/94	94/95	合計
SMSAH	51	61	49	64	58	60	55	57	45	58	60	59	677
KMKK	46	61	58	51	49	40	32	50	50	51	45	30	563
STAR	53	60	66	67	57	60	56	60	52	43	25	33	632
SAS	35	44	32	40	32	43	38	38	36	37	42	42	459
KTK	51	53	58	51	42	41	47	56	51	50	48	39	587
STF	56	51	60	58	55	64	54	60	44	54	62	50	668
STMFP										37	19	41	97
SDAR										49	45	59	153
Jumlah	292	330	323	331	293	308	282	321	278	379	346	353	3,836

NUMBER OF STUDENTS LEARNING JAPANESE 1994/95

20 May 1995

	F1		F2		F3		F4		F5	TOTAL
SMSAH	(12+12+18+17)	59	(12+13+17+16)	58	(12+16+11+16)	55	(18+17+17)	52	0	224
KMKK	(15+15)	30	(22+21)	43	(24+25)	49	(23+22)	45	0	167
STAR	(16+17)	33	(10+13)	23	(18+20)	38	(11+12+13+13)	49	0	143
SAS	(20+22)	42	(18+22)	40	(22+21)	43	(19+10+11)	40	0	165
KTK	(18+21)	39	(24+24)	48	(18+23)	41	(25+22)	47	0	175
STF		50	(21+23+17)	61	(20+18+15)	53	(14+29)	43	0	207
STMFP		41		19		37		0	0	97
SDAR	(19+14+13+13)	59	(10+12+11+11)	44	(12+12+11+11)	46		0	0	149
TOTAL		353		336		362		276	0	1,327

JOCV MALAYSIA
日本語隊員配置図（西マレイシア）

◇Kuala Kangsar　2名

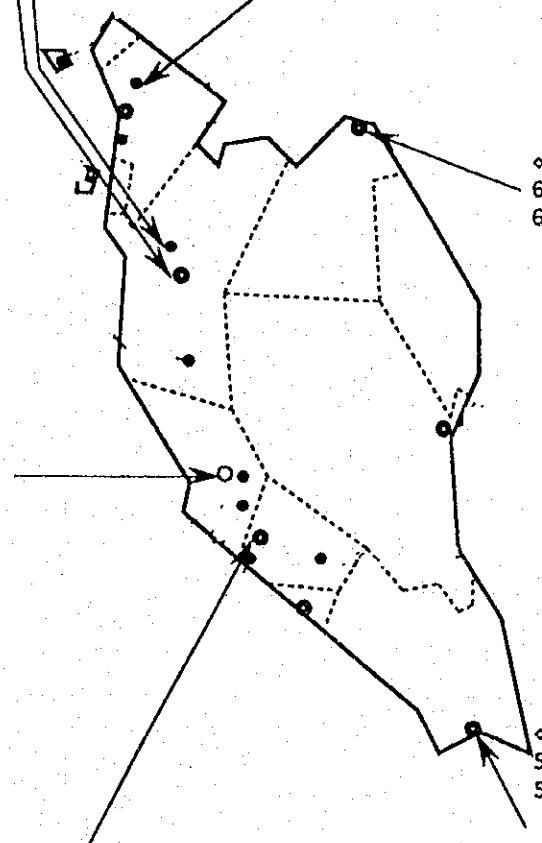
5/3 小林　香与　（日本語教師）　RS
6/2 川上　晃子　（日本語教師）　RS

◇Ipoh　2名

6/2 仲　　道代　（日本語教師）　RS
6/2 松本　純子　（日本語教師）　RS

◇Jitra　2名
5/2 桝井　智英　（日本語教師）　RS

5/3 金子　信子　（日本語教師）　RS



◇Kota Bahru　2名
6/1 森永　昭彦　（日本語教師）　RS
6/2 山上　りえ　（日本語教師）　RS

◇Kuala Lumpurおよび近郊　3名
シニア 池田富見子　（日本語教師）　RS

6/1 上飯坂朗子　（日本語教師）　RS

6/2 久保　広高　（日本語教師）　RS

◇Johor Bahru　2名
5/2 品川　直美　（日本語教師）　RS
5/3 永井　雅子　（日本語教師）　RS

◇Seremban　4名
4/2 矢野　智恵　（日本語教師）　RS
5/2 伊藤　愛子　（日本語教師）　RS
5/3 三宅　直子　（日本語教師）　RS
6/2 三原　輝子　（日本語教師）　RS

JICA